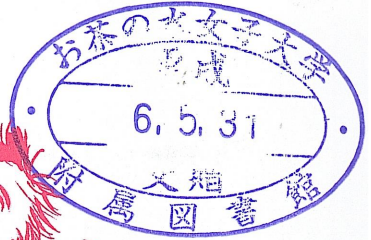
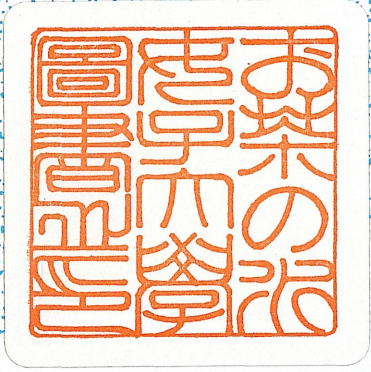


N24  
1  
93[2]

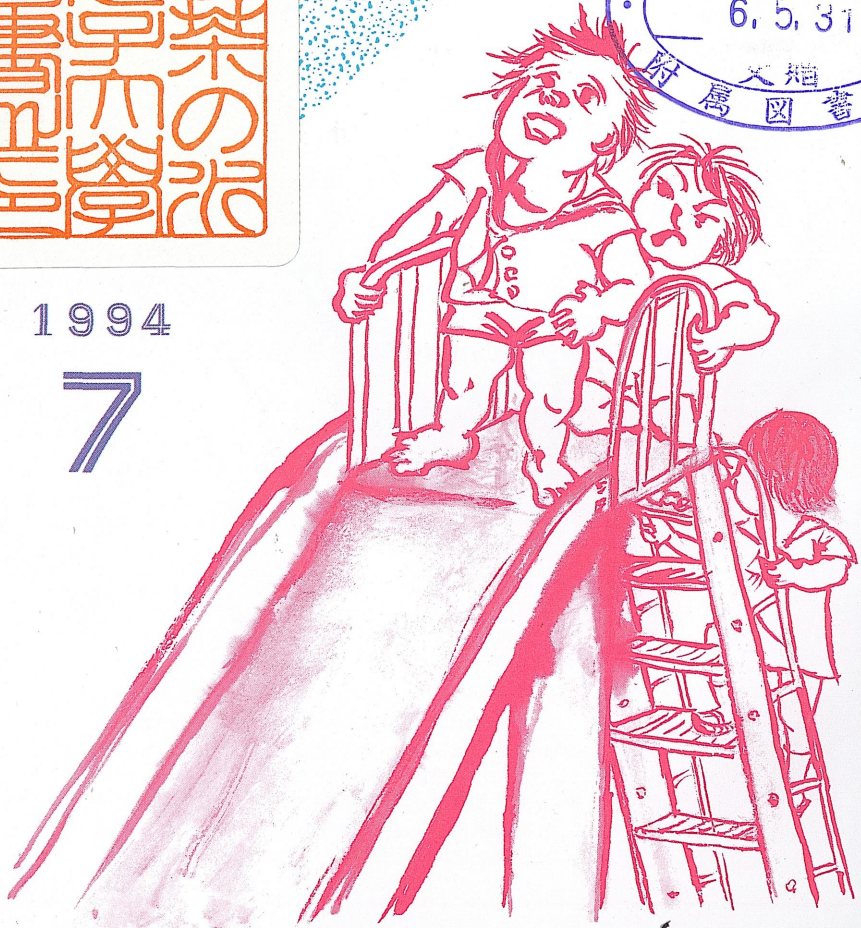
家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



1994

7



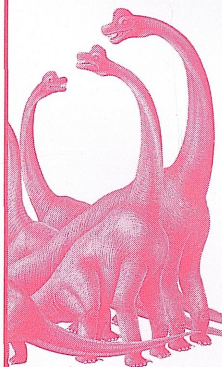
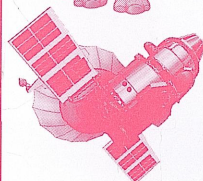
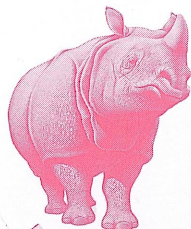


幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。

# ふしぎがわかる しぜん図鑑

監修 京大名誉教授 水野文夫

全10巻  
完結



●第1巻  
**こんちゅう**  
監修 元東京都多摩動物公園園長 矢島 稔

●第3巻  
**しょくぶつ**  
監修 園芸研究家 浅山英一

●第5巻  
**と**  
監修 東邦大学理学部 長谷川 博

●第7巻  
**きょうりゆうとおおむかしのおきもの**  
監修 国立科学博物館 小島郁生

●第9巻 **新刊**  
**うちゅうせいぞろい**  
監修 五島プラネタリウム館長 村山定男

●第2巻  
**どうぶつ**  
監修 東京都上野動物園園長 増井光子

●第4巻  
**みずのいきもの**  
監修 国立科学博物館 武田正倫

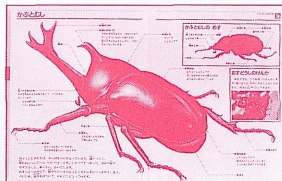
●第6巻  
**ひとのからだ**  
監修 愛育病院小児科部長 岡本 暁

●第8巻 **新刊**  
**ちきゅうかんきょう**  
監修 放送大学教授 奈須紀幸

●第10巻 **新刊**  
**はるなつあきふゆ**  
監修 理科教育研究家 中山周平



A4判・上製本・本文116頁・定価各2,000円(税込)



- スーパーリアリズムのワイドな画面によって自然界への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- 基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。
- なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげました。豊富な写真とイラストを組み合わせ、眺めるだけでも楽しい構成です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03 (5395) 6608 にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼 児 の 教 育



第93卷 第7号

幼児の教育 目次  
——第九十三卷 第七号——

© 1994  
日本幼稚園協会

写真・子供讃歌……………(4)

〈巻頭言〉卒園式または自分を解き放つこと……………間藤 侑…(6)

人間として文化的に生きる

卒業にあたり、十一年間を振り返って……………津守 真…(9)

お母さんと一緒に考えよう、子育てを

小児科医からのメッセージ……………鈴木 洋…(16)

「子育て」するクモ……………新海 明…(24)





Sとのこと……………伊集院理子… (32)

私の子ども時代(4) おじいちゃんのちいさかったころ……………松本十寸穂… (38)

Kくんと私の一年(下) 〓非言語性LD児の記録……………植田 敦子… (45)

子どもたちへのまなざし(8) カウンセリングマインド……………松井 とし… (56)

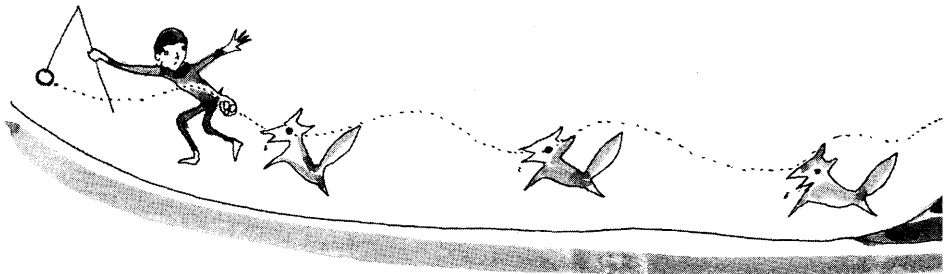
ある日の育児日記から(43)……………佐藤 和代… (58)

海は友だち……………吉澤 道子… (59)

表紙・梅田 なほ／扉題字・堀合 文子  
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵  
編集委員・本田 和子／田代和美

榊田 正子・田中三保子  
編集部・大沢 啓子





小さな動物たちと一緒に遊ぶ

# 子供讚歌

撮影・平野 清





## 卒園式または自分を解き放つこと

間 藤 侑

三月、附属幼稚園の卒園式前日でした。卒園児の座るステージの足元には、色とりどりの花がきれいに植えられた真っ白なプランターが並んでいます。そこに少々遠慮気味の卒園児の担任の声。

「子どもたちの育てたサクラソウの鉢をどこかに並べたいのですがどうでしょうか」

見ると、見事な花の盛りもあれば、咲きかけやまだつぼみをつけたばかりのものなどと、ばらばらです。鉢にも自分で名前を書いてあるのであまりきれいではありません。担任の気持ちもわかるが少しちゅうちょするところもある、そんな気分でした。

しかし、折角の担任の思いを大事にしてあげ

たいと、あそこならどうか、ここなら邪魔にならないなどと皆で考え合っているうちに、ふつと何か大切なものを忘れていることに気付いたのです。

私たちの園では、臨床的感覚を保育者の基本的姿勢の核において考えようとしています。卒園式のような行事でも、ふだんの保育と断絶したものでないように工夫してきました。その文脈で考えれば、子どもたちの育てた花を飾ることがいちばん自然だったはずなのに、整った会場作りを優先させようとしたあの一瞬のちゅうちょはいったい何だったのかと、反省を込めて振り返させられました。

あるこだわりから自分を解き放ってみると、子どもたちの花が、実はとても大きな意味をもつことに気がきました。同じに播いた種なのに成長の仕方はずいぶん違い、花の色の種類も多

様です。きつと大事にして毎日観察したり、こまめに水をやっていた子もいる一方で、ほとんど放っておいたものもいたでしょう。もっとも、そのどちらがよく育つかは簡単に評価できません。しかし間違いなく言えることは、今まで咲いていない鉢でも、やがて必ずきれいな花を開き、人の心をやさしくしてくれる時が来ることです。これはまさに、明日幼稚園を去っていく子どもたちがたそのもののように思われました。

一人ひとりのサインのある花の鉢が最前列に並んで、プランターの真っ白い面は隠れ、でこぼこの高さの花が主役になりました。でもそれは、きれいに植え込まれた先生たちのプランターの花をバックにしていたからこそ、そこに置かれて絵になったのです。その不揃いな花ほど私たちの卒園式にふさわしく、また象徴的な

ものはないと感じたのでした。

ところで、保育の場は本質的に臨床的であるとも言われますが、臨床的な感覚で日常の保育に関わっていくとは、具体的にはどういうことでしょうか。簡単に言えば、それは、評価を急がずフォローし続けること、常に関係や文脈の中でものを考えようとするなどかな、と私は思います。そしてそのためには、想像力と好奇心（問題意識）に支えられた柔軟で開かれた心が求められるでしょう。

また臨床的感覚とは、ある意味で思想と云ってよいかもしれませんが、それは本来、「〇〇は△△でなければならぬ」というような教条主

義から最も遠い所にあるからです。先の卒園式のエピソードも、最初は教条主義の奴隷になりかけていたのでした。

保育の場は、一見小学校教育などよりずっと自由度が高いと言われます。しかし本当にそうでしょうか。「あるべき姿」「ふさわしい環境」「援助の在り方」などという言葉にとらわれて、肝腎の子どもたちの姿が消えてはいないでしょうか。臨床的感覚とは、そうした言葉から自分を解放し、何よりも日常の実践から出発することにあるのです。そのためには、より高度な自己研鑽が必要かもしれません。

（新潟大学）



# 人間として文化的に生きる

卒業にあたり、十一年間を振り返って

津守 真

今年六年生を卒業する三人の子どものうち、二人は二歳のときから十一年間この学校に通った。私は十一年前に大学人としての生活から、毎日を子どもたちの中で生活する者となった。ちょうど同じ年月をこの子たちと過ごしたことになるので、特別に感慨深い。

十一年前には、こんなに盛大な卒業式をしてこの子たちを送り出せるとは予想していなかった。養護学校が義務制になり公立養護学校が全国に普及した現代に、小さな私立養護学校が果たして存続できるかどうかも分からなかった。私が大学で研究し、教えてきたことが、実際の教育の場にどこまで通用するのもかも未知であった。親たちがそれをどれだけ受けいれてくれるのかも分からなかった。子どもたちがこの小さな建物と庭の中で、長い

年月を飽きずに過ごせるのかどうかも自信がもてなかった。それほど、あの当時、未来は不確かだった。そんなときに会うことになった二歳の子どもたちが、いま十二歳になって私共の学校を卒業する。

## 原点

日常生活の基盤が変わらない。ときには惰性を伴う安定の中では、未来は予想しやしい。その基盤が変化するときには、私が生きること、また仕事をするこの原点に立ちもどることが必要になる。そうしなければ、不確かな未来に立ち向かうことができない。

私はひたすら子どもが主人公である学校をつくりたいと思った。学校は、子ども自身が生活し、成長する場である。そのことに徹しようと思った。戦わねばならない多くのことが私共の中にあつた。自らの内に、そして同時に職員みんなの中に。職員室を開放すること、壁に絵をかくこと、鍵をなくすることなど、どのひとつをとっても、大人たちの間に葛藤があつた。子どもの側からみて、ここが本当に子どもが主人公となって生きる場になっているかどうかを、私共はいつも問わねばならない。

教育は理念だけでなされるものではない。身体をもった人間の日々の営みの実際だから、戦いは常に継続している。一寸気をゆるめると大人の都合のよいように流されてしまう。

## 私は何を学んだか

私は毎日子どもたちの中で身体を動かして過ごす生活を学んだ。そこには考える材料が満ちていることを知った。とりとめのないようにみえる一日も、私自身の貴重な人生のひとつこまである。人間として生きるのに大切な徳がすべてそこにふくまれている。

ただ私共の身体が考えに追いつかない。身体の調子がよくないときには特にそうである。そんなときにも、子どもたちと応答しはじめると元気が出て一日が過ごせてしまう。保育者はだれもがそうらしくて、子どもたちに力づけられて保育者は生きてしまう。

ことに、子どもは身体の行動によって、その悩みや願いを語っていることに気が付くと、子どもとの応答がたのしくなる。子どもと過ごす一日は心のコミュニケーションの連続となり、そういうときの一日は忽ちに過ぎる。

## 職員たち

ひとりの人がどんなに頑張っても、それだけでは学校は成り立たない。保育の現場では、ひとりの人はひとり分のはたらきしかできない。私の学校にはいつも大体三十人の子どもがいるが、十人程の職員とボランティア実習生たちのひとりひとりが、原点に立って自分が出会う子どものひとりひとりと向き合わなければ、一日は成り立たない。ひとりひとりが誠実に子どもとかわるときに、保育の場の全体がダイナミックに動きはじめる。

何かことが起きたとき、職員会で、原点に立った発言をしてくれる職員の存在は貴重で



ある。眼前で事態を収める対策に終始するのでなく、本当に必要なことは何かを皆に思い起こさせ、別の視野からものを見ることを、そういう人は可能にしてくれる。こういう職員たちに支えられて学校の歩みがある。

## 親たち

この学校の親たちは、この子たちを連れて遠くから通ってくる。通学途中の電車やバスの中で子どもが走り回ったり、大きな声をあげたりもする。こうして十一年間も通うのは大変な努力である。それは子どもたちにとっては大きな社会教育の場である。母親たちは、学校にきて担任の先生たちと話すのがたのしみなのだと言う。私たちも、日々の小さなことを母親たちと話すことによって、自分の見方を確認する。

もしかしたら、もっと設備のよい、もっとよい指導をしてくれるよその学校の方が親子にとって良いのではないかと、私は途中で考えたこともある。人からそう言われたこともある。その度に私はこんな風に考えた。それはそうかもしれない。ただ、この親子と出会うことになったのは、まぎれもない現実である。その現実を優しく大切にすることは、比較を超えた、私共の生きる道ではないか。ここに来て今日の日を互いにたのしく過ごせるようにしよう。そうしている間に、十一年間経ってしまった。その親たちに励まされて今日がある。

## 子どもたち

この十一年間に子どもたちはここで成長した。

最終の段階になって気付かされたことがいくつもある。

Sくんは何年間にもわたって、裏庭でホースの水を激しく出していた。もっと違うことに誘えないものか、途中で何度も疑いを生じた。近頃、よく見ていると、ホースの水で直線を描き、矩形を描いている。幼稚部のころ、画洋紙に四角や対角線を描いていたことがあった。この子のホースの先は絵筆であり、裏庭全体が画洋紙である。ホースの絵筆はこの上なく力動的で可塑性に富み、立体的である。私共の疑いを超えて、子どもは自分の活動を作り上げている。

A子さんはHくんを見ると眼を輝かせて近づいてゆく。そんなとき、私はもう不要である。六年生になった子ども同士の間には友情が芽ばえている。

T子さんはいろいろな事情で、今度卒業を待たずに施設にゆくことになった。いつも不安定な高い所に上っていたその心の奥には、将来への不安が深くかくされていたことがうかがわれる。大人の手をしっかりと握ってはなさないこの子のゆく先に、幸があるようにと願わずにいられない。

## これから——私自身のこと

私は、愛育養護学校の前身である障害の幼児のグループにかかわるようになってから四十

五年になる。

その頃から比べると、この分野の変化は大きい。その当時は養護学校も特殊学級も殆どなかった。施設をつくり、施設に入れるのが子どもにも親にも幸せと考えられた。そして、施設にいったときに困らないように、身の自立をさせることが障害児教育の目標と考えられた。そういう考えは子どもの本質を見る眼を曇らせる。

いまは、障害の子たちと親たちの生活様式が、以前とは著しく異なる。私共の学校の親たちの大部分は、子どもを施設にあずけることなどほとんど考えていない。もっと、家と身近な社会の中で一緒に生活するようにしたいと考えている。私はその考えが良いと思う。そして普通の教育と同じように、子どもの存在感と能動性を育てることが、初等教育の基本であると考ええる。（現代の学校教育はそうなっていない。）

四十五年前に私がお世話した子どもたちのある人たちは、早い時期に施設に入り、その両親がすでに亡くなった方も少なくない。その人たちが幸せな一生を全うするようになるということは、依然として現在の教育・福祉の分野の専門的課題である。歴史の過去の責任を負わなければならないのは、まずその間を生きてきた年長者である。

私は、十一年前に愛育養護学校に専念する者となったが、子どもたちの中で毎日を過ごす楽しさの中だけにだけはいられなくなった。施設（御殿場コロニー、社会福祉法人野菊寮）の大人たちの生活ともかかわる。これは私共夫婦にとって新しい仕事なので、未来は未知である。私共にとってというだけでなく、この分野がこれからもっと人間を育てる分野として発



展してゆく時代にさしかかって、専門的にも未知なことが多い。そして、この古くて新しい専門領域に挑戦する若い人たちがいることは社会の希望である。

愛育養護学校の子どもたちの保育にはこれからもかわりつつけるが、新しい仕事加わって、人間の一生涯の視野の中で、保育と発達とを考えつつける者になりたいと思う。

自分自身が、人間として文化的に生きる者となることは、いずこにあっても、だれでも課題である。

(愛育養護学校)



# お母さんと一緒に考えよう、子育てを

小児科医からのメッセージ

鈴木 洋

〈はじめに〉

一九八九年、女性一人が生涯生む子ども数の目安となる合計特殊出生率が一・五七となりました。一九六六年の丙午の年をも下回ったため「一・五七ショック」と呼ばれいろいろと世の中を騒がせました。合計特殊出生率はその後も下がり続け一九九二年には一・五〇となりました。

世間はこれを少子化と呼んでいます。実際の出生数をみますと一九七三年（約二〇九万人が出生）より減少し始め昨年一九九三年は一二〇万人を割っています。一方子どもの健康の指標の一つである乳児死亡は戦後から着

実にどんどん下がりが、今では乳児死亡率が世界で一番低い国となっています。

つまり、我国では子どもが病気になっても滅多に死ぬことは無いということです。子どもが少ないために病気を軽症のうちに見つけだし、すばやく対応でき、医療の進歩により対応のレベルが上がったことなどがその要因でしょう。

ところが現在の「おばあちゃん」世代、昭和三十年代に子育てをした親の時代はそうではありませんでした。昭和三十年の乳児死亡率（出生一〇〇〇に対し、〇歳児が死んだ数）は三九・八、平成三年は四・四、約一〇倍

の違いがあります。おばあちゃん世代の子育ての時は子どもが脱水や肺炎などで死ぬことも多く（今では滅多にありません）いつ自分の子どもにそのような病気がおそってくるか心配しながらの子育てをしていました。小児科医の立場からは、子どもの数も多くかつ重症の疾患も多かったので、一人一人のお母さん達と十分やりとりをする余裕もなかったのではないかと思われれます。

更に少子化の背景には女性の社会進出があげられます。私は女性がいきいきと自己表現をすることはとてもすばらしいと思います。社会に出て働くのもよし、じっくり家庭内で子どもと付き合うのもよし、それぞれがもっとも輝く場を持つのがベストであると信じています。ところが世の中そうは簡単にな変わってくれません。「働く母」を妻に持つ私は世の厳しさを実感している一人です。女性が仕事に打ち込もうとすればするほど、子どもを持つしんどさが目についてしまうでしょう。働きながら子育てをするファミリーをバックアップする環境がととのわない限り、特殊出生率一・五〇は簡単には回

復しないと思います。同時に、子育ては女性（母親）の役目とする「見方」も改めなくてはならないでしょう。

最近の若い夫婦世代対象の調査によると、「父親がもっと子育てに関わりたい」と思っている人が半数を越えているそうです。が、労働環境がそれを許してくれませんか。

以上の現状をふまえて、母親と私との診察室での会話を記してみたいと思います。

#### 〈私と母親との会話〉

母親A…〇歳児の母です。集団保育に入れるとすぐに色々な病気を移されたりするから大変よ、と言われまして。本当でしょうか？

私…一般に六か月を過ぎると母親からももらった免疫がなくなり、独力で外界のウイルス、細菌と戦って行かなくてはなりません。その過程が風邪などの色々な感染症です。色々な人と交わることは色々なウイルスと交わることもあります。これまでには家庭という小さな

世界だったのでかからなかったものも、多数の人、ウイルスと出会えばかかりやすくなるのも当然です。大部分は風邪のように対症療法で治るものが多いので心配することはありません。丈夫になったと言うことは多くのウイルスと出会ったことなのです。保育園生活は早くから多くのウイルスと出会い早く丈夫になることとなります。

母親B…そのために病気にかからなくなる予防接種をした方がよいのでしょうか？ 最近の報道をみていると、予防接種のあり方が変わってきているようすが。

私…定期接種である麻疹やジフテリア・百日せき・破傷風の三種混合ワクチンは、できるときにやっておいたほうがよいでしょう。しかし今までは義務を強調された嫌いがあり、何がなんでもやらなければならぬと思っていた人が多かったようです。一般に予防注射は、注射を受ける前に射ったときの利益と射ったときの不利益を十分説明してもらい、納得したら行うのが

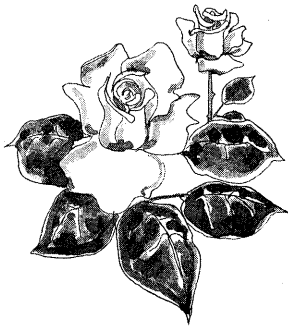
原則です。麻疹にかかると結構重くなる子どもはいます。時には肺炎を合併して大変になることもあります。麻疹の予防注射をしたときには約二〇%の人が熱を出しますが、そんなに心配する必要はありません。但し熱性痙攣をした人は十分お医者さんと相談してしましょう。百日せきは一歳未満の人がかかると結構重い病気です。集団生活にはいる人は一歳前に予防注射をして置くことよいでしょう。この予防注射はほとんど大きな副作用はありません。他に任意の予防注射として水ぼうそう、おたふくかぜ、風疹がありますがこれらは自然にかかったとしてもほとんどが風邪と同じ程度で終わります。但しかかれば約一週間は集団生活はできません。また兄弟がいれば移る確率が高いと思います。それぞれの家庭の都合や考え方で射つか射たないかは決めればよいし、わからなければかかりつけの先生と相談すればいいと思います。要は自分達が納得することです。

母親A…働く母親にとって辛いのは子どもの病気です。

簡単に職場を休めない場合、おばあちゃんなど頼れる  
“お助けマン”が近くにいない場合は本当に泣きたく  
なります。下痢や咳だけで母親が呼び出されたり、朝  
三七度以上あったら保育してもらえなかったりと…。  
保育は無理なのでしょうか？

私・本来保育園は幼稚園と違って共働きの親のための施  
設です。ですから病気を理由にして親を呼び出したり  
子どもを預からないようにすることを必要にしない  
よう保育園は考えていいのではないのでしょうか。よく  
聞く話ですが、子どもが下痢しているのですぐ引き取  
りにきてくださいと保育園から連絡があり職場の色々  
な人に頭をべこべこさげいそいで保育園に行ったりこ  
ろ、子どもがにこにこ元氣よく寄ってきたときには複  
雑な思いをしたという母親の話です。朝三七度から三  
七度五分の間の体温でそれ以上あれば引き取らないと  
いう基準は現在のところやむをえないと思いますが、  
もう一つ判断する基準は子どもが元氣がないことだと  
思います。子どもを一度預かってから熱が出たとして

も、親に熱のたかさを連絡することは必要ですが、  
元氣であれば親の仕事の都合で柔軟に対応してもいい  
と思います。また伝染性の強い病氣として登園基準の  
あった伝染性紅斑（りんご病）や手足口病は、本人の  
状態で判断したほうがいいと言われるようになってき  
ています。りんご病は発疹が出たときにはもう他の人  
に伝染させないし、手足口病では不顕性感染の子も多  
く、症状の出た子だけ排除しても意味がないからで  
す。しかもかかった子のほとんどが元氣だからです。





私はこれらの病気をよく風邪以下の病気だと説明しています。

母親B…子どもの病気が長引いたり、精神的に落ちつかなかつたりすると、必ずといって良いほど「母親が悪い」といわれます。子育ては母親だけのものではないと思うのですが…。

私…普通の子どもがいれば母がおり父がいるはずです。

しかし子育て、育児となると父の存在が何となく薄くなっております。本来子ども、母、父は三角形の関係だと思えます。母子だけの関係は父の存在があれば異常だと思えます。ましてや母親が父親同様外で働いていれば、子どもに関わる関係は同じ程度にあるべきだと思います。最近の小児科の外来に父親に連れられてくる子どもも珍しくありません。確かに母親に比し子どもの生育歴、病気の状態の説明が十分でない人が多いようですがそれでもいいと思います。今は父親が子どもを連れて外来に来ることを大事にしたいと思っています。ましてや子どもの色々な現象を母親とだけで

考えないようにしています。子どもの出生体重を忘れて母親がひどい母親で、その体重を覚えていた父親はすごい父親なのでしょう。父親の育児「参加」という言い方はもうやめ、共に育児をするように小児科医として一緒に考えて行きたいと思えます。「今時の母親は」という言い回しで母親を否定的に捉える小児科医も少しづつ減っていると思えます。

母親A…いけないとは思いますが、どうしても他のお子さんとわが子の発達を比べてしまいます。〇〇ちゃんにはウチより言葉の発達が早いとか、ウチの子の歩くのが早かったとか…。育児書通りに育ってないといれまた不安で。(笑) 頭でわかつてはいるんですけどねえ…。

私…大人と違って子どもは成長し発達するのです。成長は身長や体重が増えていく過程の言葉です。母子手帳には体重や身長を経時的にプロットするグラフがあり、三パーセントタイル、一〇パーセントタイル、九〇パーセントタイル、九七パーセントタイルの線が書

かれています。一〇パーセントと九〇パーセントとマイルの間に入っているときには問題ないのですが、それからはずれたときに色々と心配するようになります。私達医者はそれからはずれたら即何か問題があると判断するのではなく、一応注意して診察に何か異常があるかどうか判断します。ほとんどが問題なく、また一点だけでみるのではなく時間の経過とともにどう変化していくかをみていきます。成長は身長や体重のように客観的な数値で判断するのですが、発達となると神経系の発育と共に変化する機能をみるので色々と判断が難しいようです。発達は個人差が大きいのであまり人とは比較しないことです。運動発達の早い子がいると思えば知的発達の早い子もいるし、更に一時早いかと思えばその後ゆっくりというふうに色々です。発達の評価はある一時点のみで判断するのではなく、もっと長い時間経過で考えて行くことが重要です。早くから保育園という集団に入れるとすぐ色々と比較しなくなる気持ちはわかりますが、ここはじっくりみて

いく方が懸命と思います。

母親B…子どもは六か月頃アトピー性皮膚炎だと言われ、それ以来卵を与えないようにしていますが、保育園に行ったらまちがえて食べてしまうのではないかと心配です。

私…アトピー性皮膚炎は診断されるとがっかりと心配になるお母さんが相当います。街の本屋には多くのアトピー性皮膚炎の本が並べてあるし、テレビ、育児雑誌にも特集としてよくこの病気を扱っています。お母さん方が心配されるのも当たり前だと思います。アトピー性皮膚炎、喘息は小児の代表的な慢性アレルギー疾患です。昔より増えているようですがその発症機序はよくわかっていません。根本治療がないのでその病気を押さえることが治療となります。治らないとなると診断された時点でがっかりされる方がいても当たり前ですが、これらの子どもの病気はなぜか年齢と共に良くなる子が多いという臨床的事実があります。食餌アレルギーとアトピー性皮膚炎との関係がよく言われま

すが、一般の人が思うほど多くありません。思い込みで食餌制限をする前にお医者さんとよく相談した方がよいと思います。ある育児雑誌のアトピー白書によりますと、アトピー性皮膚炎の無い子どもまで食餌制限をしている親がいるということです。そこまで親を心配させているのです。一般的には二、三歳で多くの子どもが良くなると言われています。この病気は冬乾燥した時や夏汗をかく時痒みが強くなり皮膚炎も悪くなるようですが、この時期うまく軟膏やスキンケアに注意してのりきれば、そんなに神経質になる病気ではないのではないのでしょうか。

### 〈おわりに〉

昔話をみてわかるように、我国では父親と母親は重要な労働の担い手でした。子どもの世話を母親が(へべつたり)ついでみるようになったのはそう古い話ではありません。ましてや家庭外労働をする母親が五〇%を越えるようになっている現在、母親が働くことを否定的に考え

児を語っても時代錯誤と思えます。母親が安心して働ける育児環境を創る方が大切ではないでしょうか？

まずはパートナーである夫との関係です。はじめに述べた調査のように、「もつと育児と関わりたい」と思っている男性(父親)は半数をゆうに越えています。母親の問題は、すなわち父親の問題でもあるのです。最近是不況と企業意識の変化から(？)休日に街を歩く親子連れの姿を見かけるようになりました。デパートの赤ちゃん休憩室にも慣れた手つきでおむつを替える父親の姿を見かけます。私ごとですが十一年前あるデパートの育児室で長女のおむつを替えていたところ、突き刺さるような視線が妻に浴びせられました。「育児は母親がすべきもの」という暗黙の了解があったからでしょう。小児科医の私はおむつ替えなど朝飯前でしたから「かわいそうなダンナさん」と周りには見えたのかも知れません。

育児の基本は夫婦関係にあると私は考えています。「私だけが忙しい」と一人で悶々とするのはやめて、夫にして欲しいことをきちんと伝え、話し合う姿勢を持ち

続けた方がよいと思います。

病気にしてももっと肩の力を抜いて付き合ってみてはいかがでしょう。肺炎や下痢による脱水症で命を落とす時代ではありません。子どもの数が少ない現在、些細なことでお医者さんを訪れても嫌な顔をする医者はありません。思いやりに思います。気楽に医者に行き色々なことを一緒に考える時代だと思えます。急性感染症は軽症化しましたが、一方慢性のアレルギー疾患は母親の心配の種のようなです。しかし実際は急性疾患ほど怖い病気ではありません。慢性疾患なのに急性疾患のように早く解決しようとするからいらいらするのです。正直に言いますと、現在は子どもが少なく病気になっても昔ほど重症化しないので小児科医は困っているのです。その結果小児科医をめざす若い先生が減っています。子どもを持つ親にとって病気に良い時代だと言うことです。母親が子どもだった頃の二、三〇年前は乳児の死亡率も高く、子どもを育てながらいつ自分の子が重い病気になるのではないかと心配して育てていたのです。おばあちゃん

一緒に生活している人はわかると思いますが、おばあちゃんが子どもの病気に関し異常に心配するのはそのためです。

以前専業主婦の母親と働いている母親に対し、育児について意識調査をしたことがありましたが、その結果は専業主婦の母親は朝から寝るまで子どもと一緒に他の人と話をする機会も少なく、頼りになる夫も仕事であてにならない非常に孤立した気持ちになっており、反面働いている母親は保育園に子どもを預け、保母さんや他の母親とも子どもに関し相談したり話をし、共働きの関係上夫も適度に育児に関わり孤立感がないと言う結果が出ました。しかし働くことで子どもとの接触時間が減り子どもには悪いと言う罪の意識を背負っている人が多いということもわかりました。母親は「母性神話」という化け物に追われながら子育てをし、働いているのです。一小児科医である私は「母性神話」の化け物に負けないように働く母親と共に付き合っていきたいと思えます。

(鈴木こどもクリニック)

# 「子育て」するクモ

新海 明

自然界は生物の種類数に見合うほどの多様性に富んでいます。

「子育て」というと、哺乳類や鳥類の専売特許のように思えますが、魚類の中にはオスが口の中に子魚を入れて保護しているものがありますし、昆虫類のハチやアリに見られる「子育て」はつとに有名です。

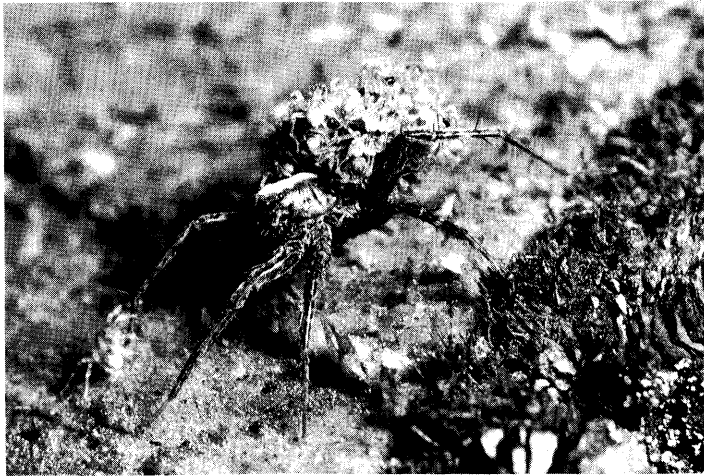
クモの世界でも「子育て」をする種類が僅かではありますが、昔から知られていました。ヨーロッパ産のヒメグモ科の一種や中央アジア一帯に広く分布するイワガネグモ類、南米にいるアシプトヒメグモ類などがその代表です。

御存知の方もいるかも知れませんが、クモ類の多くは卵のう（卵を入れた袋）から出てきた直後の一

時期を除いて単独生活をしています。また、親は卵を産むと死んでしまったり、産みっぱなしで移動してしまうことが多いので、「子育て」の条件である

「親子が生活の場所を共にする」ことが実際上起こりにくいために「子育て」をするクモはあまり多くありません。特に、日本ではつい最近までコモリグモ類以外には全く知られていませんでした。

このコモリグモというのは読んで字のごとく「子守りグモ」でして、母グモは産卵後その卵のうを後生大事に抱えて生活しており、子グモたちは卵のうから出てくると、一斉に母グモの背中によじ登り「おんぶ」されて運ばれることから名付けられました。(図1)。けれども、このクモでは見た目には「おんぶ」される以外には親子のコンタクトはなく、母グモが子グモに餌を与えるわけでもなく、時間がたつにつれて子グモは親の背中から脱落するようになつて分散してしまいます。そのためか、あまり「子育て」をするクモというイメージはあり



◀ 図1 子どもをおんぶしたコモリグモ

ませんでした。

これに対して、外国産のクモたちでは親が捕らえた餌を子グモに与えたり、中には母グモが捕食して消化した液体（これを「スパイダーミルク」と呼びますが、一種の吐瀉物）を「吐き戻し」て口移して子グモに与える種類もあります。また少し大きくなった子グモが母グモと一緒にあって、網にかかった獲物を捕らえるといった共同の狩りをする種類すら知られていました。

### 「子育て」をするクモが日本にもいた

一九八五年のことです。当時は奈良女子大学の学生だった伊藤千都子さんはヒメグモという、ちょっとした伊藤千都子さんの林や公園にいくらでも見られるクモで、母グモが自分で捕った獲物を子グモに与えるという「子育て」行動を日本で初めて報告しました。「灯台もと暗し」とはまさにこのことでした。私自身を含めて我が国のクモ研究者は、日本にいるあら

ゆるクモの生活を結構知っているつもりで、実はあまりその生活を見ていなかったようです。

「子育て」をするクモは何も遠い外国へ行かなくても日本にももつといるのではないかと思い、私は「これは」と思うクモの再点検を始めました。調査した多くのクモはやはり「子育て」はしていませんでしたが、翌年の一九八六年にはキボシヒメグモとコガネヒメグモというクモが、ヒメグモのように単に捕獲した餌を与えるだけでなく、ヨーロッパ産のクモなどで知られていた「吐き戻し」で餌を与えていることを日本で初めて発見しました。さらに、一九八九年にはアシブトヒメグモというクモもヒメグモと同じようにして、子グモに餌を与えていることが判明したのです。この間にはメガネヤチグモというクモの子育てを記録した論文が、戦前の日本ですでに発表されていたことが再発見され、神奈川県県立高校教諭の谷川明男さんと生徒の堀由起子さんによって追認されました。このように、この五、六

年間ほどで「あっ」という間に日本産の子育てグモはおよそ十種類ほどにもなっていました。

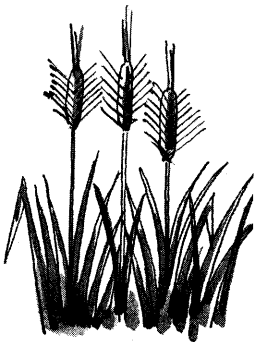
そして、一九八九年には日本で初めてコガネヒメグモによる「吐き戻し給餌」の様子がVTRに収められテレビ放映されました。これはヨーロッパ産のクモでイギリスのBBC放送局が撮影して以来、世界でも二番目のものでした。

### 親子のコミュニケーションは？

「子育て」をするクモの発見談はかり長々と書いてしまいました。何故このように「子育て」が注目されるのかといいますと、感情的に人間が理解しやすく興味深いということもありますが、純生物学的にも大変に面白いものなのです。

まず、第一にクモのような肉食動物では共食いなどは当然の出来事です。親子においても同じように排他的ですから、「子育て」をするクモがどのようなにして「親子のコミュニケーション」を交わしてい

るのか、というメカニズムの問題があります。クモは目でみたり、音声を出したりできませんので、母グモが子グモを、子グモが母グモをどのようにして

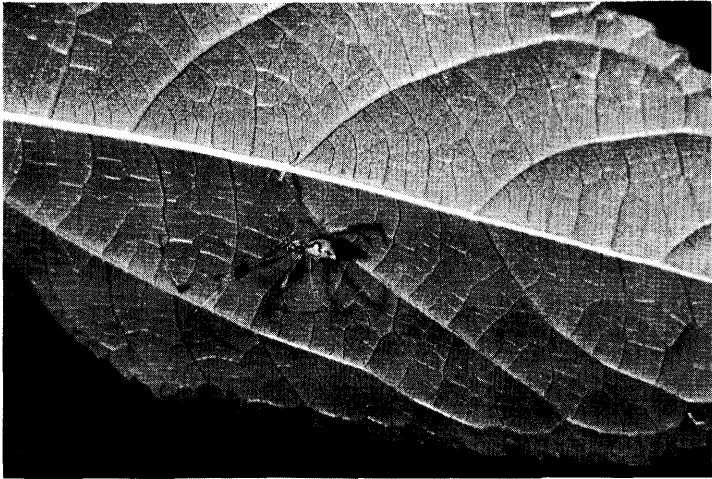




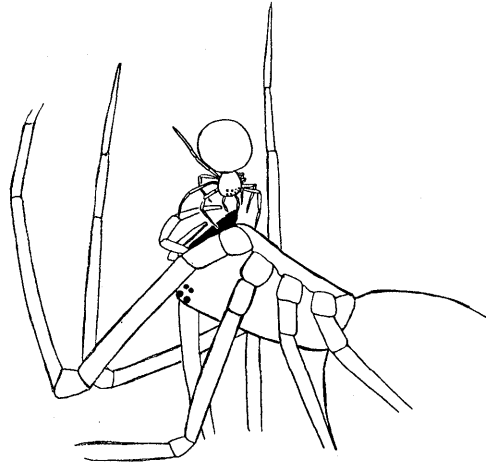
認識して見分けるのかという点に最大の興味が集ま  
ります。また、このような「子育て」行動がクモ類  
の中で生じたのはなぜか、という進化的な問題もあ  
ります。このうち進化的な問題の解答はなかなか容  
易に見付けることはできませんが、親子間のコミュ  
ニケーションのメカニズムについては最近になり少  
しだけ、その実態がわかってきました。

### コガネヒメグモの場合

コガネヒメグモはクモの中でも黄金色に輝く体色  
をした美しい(！)クモです。(図2)。日本各地に  
普通にみられますが、その数はあまり多くありません。  
私はこのクモを富士山麓の須走でたくさんみつ  
けました。コガネヒメグモは七月下旬から産卵を始  
めますので、夏休みいっぱい「子育て」の様子を簡  
単に見ることが出来ます。卵のうから出たばかりの  
子グモたちは八十九頭(クモは匹ではなく頭で  
数えるのが普通です)くらいいますが、ほとんど自



▶ 図2 葉裏にいるコガネヒメグモ



▼ 図3 コガネヒメグモの口移し給餌

分の力では餌を捕ることはできません。この頃の子グモたちは母親の口から吐き戻された「スパイダーミルク」だけで育てられています(図3)。このときの様子を撮ったVTRをよくみると、母グモと子グモは盛んに足と触肢を使って触れ合っているのです。この触れ合いによって親子の認知が行われているのは確実と思われませんが、それ以上のことはまだ明らかにされていません。

少々大きくなると、子グモは母親が捕ってきた餌をもらうようになります。母グモの捕った餌に次々と集まり群がって餌を食べる様子は壮観です。さらに、大きくなると母親と一緒に網に掛かった獲物を捕らえるようになります。もっともこの間でも母グモから「おっぱい」をねだることをやめないのは人の赤ちゃんと同じですが……。

ある程度大きくなった子グモたちが網にかかった獲物のところへと移動して、母グモと共に餌に糸をかけて咬みつき、一緒になって自分たちの隠れ家へ

と運ぶ様子は「共同の狩り」を思わせるものです。この時に上から降りてくる母と子、子ども同士が接触してもケンカや争いになることは全くありません。このようなことを見ていると、母は子を、子は母をなんらかの形で認識しているはずであり、その要因が何かと考えさせられません。現在のところ「匂い」あるいは「糸の振動」などが考えられて解析されていますので、近いうちにそのメカニズムが明らかにされそうです。

### 継母に育てさせると

親子関係を調べるにはもう一つ方法があります。それは親子の入れ替え実験です。私はコガネヒメグモとアシプトヒメグモという二種類のクモを使って実験を試みました。すると、コガネヒメグモの場合には継母でも子グモたちの面倒をよくみる事が判りました。極端な場合には子育ての経験がない成体のメスグモでも子供たちを育てるのです。何もない

かったはずの網の中に急に子グモたちが出現するので、初めは少々とまどっています。子グモたちが口のまわりに来て、「ミルク」をねだるとすぐにそれを与え始めました。あとで外国の文献を読んでもみると、「子育て」グモの多くはこのクモと同じで入れ替えても、簡単に子グモたちを受け入れることが判りました。

これが普通なんだと思っていたところ、アシプトヒメグモでは予想がみごとに裏切られました。このクモの場合はほぼ同じくらいの子グモを持つ親同士の入れ替えならば、まあまあ受け入れるのですが、成長段階が異なっていたり、子育て経験がないメスの場合は、なんと継母が子グモを襲って捕食してしまいます。子グモの方は母グモが入替わっていることに全く気付かないようで、安心して母グモに近づいていくのですが、その子グモを継母は容赦なく咬みつき、糸で巻いて食べてしまいます。何回か実験を繰り返してみましたが、あまりに残酷なのでい

つも気が重くなり、ためらったものです。

このような観察結果から、私はこれらのクモの親子間の認知には網の糸を伝わる振動や匂いなどばかりでなく、母グモの子育ての経験の有無、すなわち「履歴」が関係しているのではないかと考えています（特に、アシブトヒメグモの場合）。このようなことは現在まで全く知られていませんので、さらに調査が進めば面白い研究になりそうです。

### 気持ち悪がらずに

ここでお話してきたクモはどれも、近くの公園の木々やハイキングなどで訪れる東京近郊の山々で見られる極くありふれたものが多いのですが、その生態はまだまだ判らないことばかりです。「子育てするクモ」についても僅か十年前までは日本では全くその存在が知られていませんでした。ほんの少しの根気があれば自然はその興味深い姿を私達の前に現してくれるようです。

「クモ」というとすぐに「気持ち悪い」とか「毒があるので怖い」、と思う気持ちは判らなくもないのですが、日本産のクモで咬まれたら死んでしまうような毒をもったものはいません。また、クモは自分から皆さんに決して悪さをしかけたりしません。庭や公園で普通にみられる、この小さな生き物の前で足をとめてその生活の一部を覗いてみて下さい。ひよっとすると、思わぬ大発見があるかも知れませんが、

(京都大学理学部研修員)

# S と の こ と

伊集院 理子

S と私が最初に出あったのは、二年前の四月、三歳からの持ち上がりの子どもたちに、四歳から十四名の子どもたちが加わって、新しいクラスとしてのスタートをきった入園式の日のことであった。それまでは、二十名だった子どもたちが、三十三名にふくれ上がる人数の変化には、圧倒されるものがあった。人数の変化だけでも騒然とした感じを覚えるのに、その日は生憎の雨で、何とな

く子どもも落ち着かない様子で、「前途多難」という印象の幕明けであった。

そんな中で、「この子は手強いぞ」という気持ちを私に抱かせたのがSであった。Sは、わざと椅子の上に立ってみたり、椅子から立ちあがって動きまわったりしていた。ただ何もわからずに興奮して騒いでいたのではなく、Sは、新しい集団の中に、自分が後から入っていくことを敏

感に感知して、意識していたか、意識していなかったかはよくわからないが、自己を誇示しているように思えた。何もかもお見通しの上で行動しているような印象をその日私はSから受けた。

四月の最初のうちは、新しい環境の開拓に心が奪われていたという感じで、その「手強さ」を発揮し始めたのは、四月の終わりから五月にかけてであった。

Sの両親は共働きで、母親は常勤の勤務医であった。母親がSを迎えに来られるのは、一週間のうちで一日で、その他の日は、日替わりでお迎えの人が変わる毎日であった。お迎えの人は、SのことをSの祖母の家まで連れていくのが仕事である。四月の間は、Sが三歳の時にちがう幼稚園に通っていた時にも送り迎えをしてくれていた人が迎えに来てくれていたが、その人の都合が悪くなったため、五月に入って、急ぎよお迎えの人が変わることになった。その頃から、Sは、お帰り

の時に顕著な形で抵抗を示すようになっていった。お帰りの時間になると、わざと園庭に逃亡して戻って来なかったり、「もっと遊ぶ」と言っていて、自分が使っているものをがんとして片づけさせないようにしたり、片づけようとしている友だちをたたいたり、お帰りの体制を整えようと友だちが椅子を並べようとすると、椅子を振り回して妨害したりした。ある時、新しいお迎えの方に一旦渡した後、Sは「おばあちゃんの家に行きたくない。新しい自分の家に帰りたい」と私に訴えてきた。そして、自分の身のまわりのことは何でも自分でできるSが「外ぐつをはかせろ」と私に命令して、自分からくつをはこうとしなかった。その時、私は、降園後、楽しい時間が待っていないSの辛さ、無理をしいられているSの生活をつきつけられた。

Sの満たされなさは、お帰りの時だけではなく、自分のやりたいことがうまく見つけられない

時や、一つの遊びが一段落して次の遊びに移る移行の時などに表面化した。他の友だちのやっていることを妨害してみたり、通りがかりに手や足を出して友だちを威嚇したりした。じゃまをされたら、不意討ちをくらった相手がSに対して向かっていこうものなら、自分が犯されることに対して異常に過敏に反応するSは、向きになって、徹底的にやり返さなくては気がおさまらなかつた。そういうSを力ずくで押さえこまざるを得ない事態が毎日のように起こった。

Sは何をしでかすか分からない、Sが荒れだしたら手に追えない、という考えがいつも私の心を覆っていた。一方、Sのような無理をしいられている子どもは、良い所も悪い所もまずは丸ごと受けとめてあげなければいけないという概念的な考えにも私の心は縛られていて、その両者の間を揺れ動いていた。今から思えばSが荒れだすとまず力は押さえこんで、その後、慌てて「先生は、

Sちゃんのことよく分かっているわ。Sちゃん  
は、しめたかったから、しっちゃったのよね」な  
どと勝手に解釈したSの気持ちを押しつけていた  
ように思う。力で押さえこんだ後味の悪さがいつ  
も心に残った。その後味の悪さを、もしそうしな  
かったら他の子どもにも大変な危害が及んだにちが  
いないと思うことで打ち消そうとしていた。でも  
その後味の悪さは、そう簡単に打ち消されるもの  
ではなかつた。その後味の悪さを少しでも補いた  
いという気持ちから、Sの本当の気持ちを受けと  
めるのではなく、今から思えば、Sに迎合してし  
まっていたように思う。

Sの一挙手一投足に、私は振りまわされた。S  
が比較的調子よく過ごせた日は気分がよく、反対  
に、Sが荒れた日には打ちのめされたように落ち  
こんだ。毎日の保育がとても苦痛に感じられた。  
Sとの問題状況での悪循環を自分から断ち切る  
う、Sとの関係を変えていこう、変えていこうと

しても、なかなか自分の方からは変わっていきけなかった。

しかし、Sはいつも荒れているばかりの子どもではなかった。自分のやりたいことがはっきりあって、その事に対しては、とても意欲的に自分の力を出して工夫して取りくむ子どもであった。

物事に集中して取りくんでいる時のSに対しては、Sのこうしたいという思いが満足できるような形で達成できるようにと思い、援助をつみ重ねていった。

Sは、やりたいことがある時はとても落ちついて取りくむのだが、相変わらず、空白の時には人を困らせることばかりでかし、こちらのSへの関わりも、咎めたり、制する関わりから、どうしても逃れられなかった。

そんな状況で、新しい春を迎え、Sたちは年長児になった。年長になったからといって事態は急に転回してはくれなかった。

でも、年長になって幼稚園中の遊具を最優先に使えるようになって、Sの遊びへの集中度、遊びの中でのSの力の発揮の度合い、まわりの友だちのSの力への承認度が増していった。





ある時、Sは他の男児数名と、遊戯室で大型積木とブロックを全て使って、基地とその基地につながるトンネルのようなものをつくりあげた。つくりあげて少ししたら、片づけの時間になってしまい、ちょうどその日はSのクラスが遊戯室の片づけの担当の日で、Sのクラスの仲間が遊戯室に集まってきた。Sたちがつくったものはとても立派で、魅力的だったので、男女を含めて数名の子どもが、Sたちに、中に入ってみたいかと尋ねた。Sは「いいよ」と簡単に受け入れた。そこで入りたい人がトンネルのような入口から基地に入って、最後にSたちがもう一度入ってからみんなで片づけようということになった。次が、最後のSの番という所で、トンネルのようなものが崩壊してしまい、Sはどうしてももう一度つくり直して、自分が入ってからでないと片づけられないと言いはった。降園の時間はもう目の前にせまっており、クラス全員の子どもをこれ以上待たせるわけ

にはいかなかった。でも、私としてはSの気持ちに痛いほどわかった。私は、SとSに協力して主に力を発揮してそれをつくりあげたもう一人の男児とに他の友だちはもう帰らなければいけない時間だから部屋に戻るが、二人はもと通りに直すまで遊戯室に残ってやっていると伝え、他の先生に事情を話し、遊戯室に残した二人を見守ってもらうことにした。他の子どもたちを降園させ、遊戯室に戻ると、ちょうど元通りに直せたところで、Sともう一人の男児は一度だけトンネルをくぐって基地に入ってから降園した。その時の私の判断が正しかったかどうかは何とも言えないが、その時、心から私がSの気持ちになれたとはじめて思えたような気がした。

そのことが転機になったかどうかは分からないが、その頃からSの方が私への関わりを変えてきた。これまで、私がSの行動を咎めたり、制したりすると、Sは抵抗を示すばかりであったが、気

持ちを少しずつであるが素直に出してくれるようになった。「だって、〇〇が、入れてくれなかつたんだもの」Sの口からそう言う言葉が聞かれるようになった。そうなる、「そうだったの」Sの気持ちに心から私も共感できるようになっていった。共感した後には、「でも、そういう時はしつた方がよかつたんじゃない」一言いうと、ちゃんと聞く耳をもつてくれるようになっていった。こちらの言う通りにすぐなるわけではないが、これまでは一度荒れると長びいて手当たり次第被害を及ぼしていたSが自分で気持ちを立て直せるようになっていった。

思い返せば、辛い長い道のりであった。随分と遠回りをさせてしまった。教師である私の方がSとの関係を変えていかなければならなかつたのに、それができなかつた。Sの方が私とSとの関係変革の先駆けとなつてくれた。それからは、Sとの関係、他のクラスの子ともとの関係を心から楽し

めるようになった。私がSのことに心を奪われ、自分自身を変えていくことができなかつたことが、どれだけ他の子どもにも影響を及ぼしたかわからない。Sだけではなく、クラス全員の子どもに遠回りをさせてしまった。

卒園式の日、記念撮影をした。この二年間の間にも、行事の折など、時々クラス全員で記念撮影をしてきた。Sを記念撮影におさめるのはいつも大変だった。私がりになりになってSを無理矢理おさえている写真が残っている。卒園式の日「Sくんのとなりでとうろかな」という私の一言に、Sは無言で答え、Sと私は記念写真の真ん中におさまった。私の心に深く残る写真になるだろう。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

私の  
子ども  
時代  
(4)



おじいちゃん  
の  
ちいさかつたころ

松本 十寸穂

松本のおじいちゃんに、子ども時代のお話をうかがいました。おじいちゃんは、大正五年、大阪府南河内郡の中村というところで生まれ育ちました。このお話は、大正末期から昭和のはじめのお話です。  
(編集部)

「きつね」

おじいちゃんの小さい時分の田舎の話をしてあげよう。

私の生まれた村はすごい田舎で、大阪と奈良の境、南に金剛山、東に葛城山のある山の



中の村なんだ。冬は日があたらなくてとても寒くて、夜になるとまっ暗で星一つない。だから子ども達はみんな家うちにいる。家うちにいることしかできないんだ。それでも私は夜になったら川かわへ行った。山にうさぎとりの仕掛けをかけた。そしてうさぎやいたちをとって楽しんだよ。実益はあったよ、少しは。山鳥、たぬき、いたちがとれた。とって毛皮を売るんだ。買いくる人がいてね。小使い稼かせぎというよりも、親がよろこんだんだから、家計の足しになったんだらうね。そうとうなものだったよ。

ある時、兄さんと夜の猟に行ったんだ。もちろん密猟だ。本当は夜はいけないんだ。日の出から日没までしか猟をしてはいけないいきまりがあつて、狩猟免許を持っている人でも、とりすぎを禁じるために、夜はやらなかったんだ。だから子どもは、夜行くんだ。夜魚とりに行くのは「よぼり」というんだ。

まっ暗な道なんて今は知らないでしょ。細い細い道が続いていて、星の光でその細い道だけが白く見える。ため池がたくさんあつて、その中にお地藏さんをまつてある。"地藏池"というのがあるんだ。お地藏さんは死んだ子どもの供養だから、普通の子どもは近寄り難いくらいこわい所なんだよ。

六つ年上の兄さんと二人で、わなに作る竹の材料やとれた魚やえさをかついで帰ってきたんだ。そしたら何だか知らないけど急に荷物が重くなった。「しっかりしろ」と兄さんに言われながら、歩いていくと、隣村に入ったとたん、どういうわけか軽くなったんだ。



その村を通過すると明かりがあかあかとついて、コンコンと大きな音をさせて村の人がなにかやってくるんだよ。十二時半ごろだよ。「何だろう」と思っていたら、兄さんが「あれは醤油屋の仕込みの杜氏とうじが唄をうたっているんだろ」というので、そうかと思いつながら家に着いたんだ。

親父おやじさんが「ずい分おそかったな」とむかえてくれた。「醤油屋は今ごろまでやっているんだね」と言うと、「今はもう醤油の仕込みをする時期じゃない。それはきつねにだまされたんだろう」と、親父さんが言うんだ。それをきいて体中からだじゅうがゾッとして背中が寒くなって、こたつに入っただけに寝てしまったよ。本当にきつねにはかさされたのかよくわからないけど、「きつねだ」ときいた一言で、ゾッととして納得したんだね。

次の日行ってみても、もう何もやってないんだ。こういう話が伝わるんだろうね。大人は面白半分おもしろ半分に言うんだろうけれど、子どもは理屈りくつじゃなくきつねにだまされたと信じていたね。

### 「将棋」

若い時分、奉公したてのころの話をしよう。見習いの丁稚奉公ていぢほうこうだよ。

お客さんに西川さんという按摩あんまさんのうちがあったんだ。使いでそこに行くと、全く目の見えない若主人が、「ぼんさんぼんさん（小僧さんのこと）、将棋教しょうぎえてあげようか」って言うん



だ。目の見えない人がどうやって将棋をさすんだろうと思っていたんだ。

初めは、「歩三つ」でやるんだ。先生の方は歩三つと王将しかもっていない。私の方は、全駒そろっている。それでもころっと負けてしまう。毎日、毎日、そこへ遊びに行っ  
て習ったんだ。

ある時「どうして将棋の駒が、どこに何があるかわかるんですか？」って聞いたんだ。

そしたら西川さんが言うには、「わしは全部知ってる。将棋盤の九・九・八十一を全部心の中に描いている。だから、わしが目が悪いものだから相手が駒を勝手に動かしたってだめなんだ。駒をおいてもらう時に、何の駒を前後、左右にいくつ動かしたと言ってもらおうと、それは全部心の中の将棋盤に記憶する。とった駒もわかる。わしの将棋の駒には全部指でさわってわかるように印がしてある。穴をあけたり、小さなくぎをうったりして」と言うんだ。その時、目の悪い人は、とても頭が落ちついているんだな、と思ったね。

実際、勝負の方は、一回も勝てなかった。目の悪い人と将棋をさすのは、誰もごまかすことはできないんだ。地震があっても、火事があっても、絶対忘れないから。先生が歩三つからだんだん歩を全部並べて、槍をはずしたり角をはずしたりして、上へ上がっていく。対等に全駒並べてやると、三回目で負けてしまう。ハンディがついていればまあまあだな。

歩三つというのは、大阪では「歩三コ」といって、素人では絶対勝てないんだって。相



手のいい駒をとることができない。とる駒は歩三つしかない。むこうは歩でも押しかけてきて金になれる。金が三つあれば勝てる。歩は一つしか進めないのも、とつても敵陣に入って動かなければ、金になれない。初めは歩の動きしかできない。角の前に歩をおかれると動けないでとられた場合、相手の歩は金になり、しかも角ももつことになる。将棋は敵の駒をとつてうまく使うということを教えられたね。

「うさぎ」

小学校にあがる前にうさぎがはやったんだ。大人の間で、ベットとしてうさぎとチャボがはやったね。

私は小さいころから、生まれたばかりのうさぎの雌雄の鑑別ができたんだ。うさぎは難しいんだよ。生後十日位で目があいて、そしたらわかるんだ。

当時、すごく流行したから、うさぎを買い集めに来る人がいたんだ。田舎の山の中の家で飼っているうさぎを、百奴いくらで買い集めてきて、一羽いくらで市場のオークションに出すわけだ。村では植木のオークションが毎日あるので、ついでにうさぎも出す。チャボ、おもと、らんなどめずらしいものも田舎の山奥の村へ行って買い集めてくる。ところがうさぎは、買いに行く人が、オス・メスの判別がわからない。どちらが高いという訳ではないのだけれど、オスが何羽、メスが何羽かとわかっていけば、売る時に有利なんだろ



うね。私は、その人の自転車の荷台に乗せられて、大和の国まで山を越えて買いに行く。おいしいものを食べさせてくれたよ。「ほん、見て」って言われて、オスはこっちの箱、メスはこっちの箱ってわけて入れる。むこうの人にはだまっけていて、こちらだけはわかっている。「これはオスばかりで、ダメだな!!」なんて、半分だまして、安く買ったつもりだよ。私は、まだ五歳位だから、ただおいしいものやおみやげを買ってもらえるのがうれしくてね。

うさぎは、次の日のオークションに出されて、誰かがせり落とす。めずらしい今でいうバンダうさぎなんかがあると、高く売れた。めずらしいうさぎ、例えば目の黒い白うさぎやアンゴラなどはあの時代十円位したね。十円で米一俵半買える時代だったから、すごくいい値だったね。私はおだちに五十銭位もらえたかな。元手は二、三円出していたけれど、ぼろもうけたね。とにかくペットは高く売れた。村ではペット用にセキセイインコ、養殖のアメリカンブルフロッグ（カエル）、おもと、チャボ、うさぎ、棕櫚竹（しょうりちく）などつくっている家が多かったね。

私の村には大阪市の公園課で人夫のようなことを仕事にしていた人が多くて、公園課は動物園や園芸などを管轄していたので、動植物の育て方をよく知っている人が多かったんだ。山と山にはさまれて、日照時間の少ない寒い村なので、お米もたくさんとれないし、麦も五月ごろにならなければできない。山のかげだからね。そんな村だから、ペット





が現金収入になったんだ。趣味と実益をかねていたんだね。  
うさぎの鑑別は、小さいから覚えられたんだろうね。大きくなったらできない。にわとりの鑑別でもそうだ。小さい時に覚えたら何でもないことなんだよ。なんだろうね、感なんだろうか、見たらわかる。小さい子の方が純粋なんだろうね。

(録音編集・編集部)



# Kくんと私の一年(下)

～非言語性LD児の記録～

植田 敦子

## 前回のいきさつ

落ち着きのない個性的なKくんを私は平成元年度、受け持つことになった。入学式では校長先生の挨拶に大声で答えるし、名前を書かせれば虹色の文字が描かれるわけで、とにかく他の児童から大きくはずれていた。

一学期も初めの頃は、彼なりに授業に参加していたのだが、次第に飽きてきたらしく鉛筆はKくんの大好きな太鼓のばちと化し、教室のいたる所でトントコトコ打ちならす姿が目につくようになってきた。そればかりか鉛筆を食べてしまうのでちびたKくんの鉛筆が落とし物箱にたまるようになり、たまにかねた私は、「鉛筆を持たせないでください」と親

に連絡した。

またKくんは給食を食べない児童でもあった。食べたとしてもものすごく時間がかかるし、偏食であった。お残りになると、教師の目を盗んで、わざとこぼしたりするので、私も思わず口元がゆるんでしまうのであった。食べる量がわずかだったにもかかわらず、Kくんの体は幼児のようにふにゃつと肉づいているのが特徴だった。

暑くなるにつれ、Kくんはくつもくつ下もぬぎだし、ペタペタという足音が耳につくようになった。持ち物の整理の悪いKくんに代わってお友達が拾ってあげたり、お帰りの会の時、私がランドセルの中に入れてたりした。それで、Kくんは、自分の持ち物にいよいよ無頓着になっていった。

生活態度は悪かったKくんだが、教科の方は学習しなくてもよくできた。本好きで知識は豊富であったし、何よりもすばらしかったのが音読であった。

登場人物の気持ちを実に表す語り口で、クラスのみんなから拍手をもらう程であった。

いろいろなエピソードを作った風雲児・Kくんであったがやがて一学期、夏休みのプールも終わり、二学期が始まった。

## 九 運動会の練習

九月に入り、一年の担任三人は末に行われる予定の運動会の練習に躍起となっていた。種目は、徒競走、玉入れ、表現(ダンス)の三つだが、いずれも今一つ、びしっと決まらないので、子どもの疲れ具合や気分などおこまいなしに、何度も同じことを繰り返させていた。

表現は二年生と合同で、わらべ歌を取り入れた子どもの遊びをテーマにしたものだった。二年生はともかく、一年生は、動きを身につけるだけでも大変

なのに、その上グループ移動がたくさんあったので、要求水準が高すぎたなあと今となっては反省することしきりである。Kくんのグループは、自分がきちんと行つた上、さらに彼をリードしていかなくてはならないのでいらだっていた。Kくんこつち”とか”Kくんこうするの”といった大きな、しかし私のことを気にしてちょっとセーブした声が耳に入った。みんなすっかりやらないと怒られ、給食も食べさせてもらえないと本気で思っていたんだろ  
うなあ。

「みなさん、ここでちょっと休憩にします。お水を飲んでもいいですよ」

「わあっ」

と、言つて散り散りになり、思い思いの遊びが校庭中にくり広げられた。(やっぱ子どもはこうでなくっっちゃ)と思いつつも、”集合”と声をかけ、再び、びしぼしとやり始めた。あれっ、Kくんがま

た、にわとり小屋の近辺でうろろしている。

「グループの人、呼んでいらっしやい」

腕をひっぱられるように連れてこられた彼の口がなんと紫色にそまっていた。教師も子ども達もびっくり。手にはどこで見つけたのか、ヨウシユヤマゴボウのつるがしっかと握られていた。

## 十 作文がお便りにのつた

運動会も無事終わったので、私は作文を書かせることにした。””しました。そして””しました。”式にならぬよう、かけっこならかけっこのことだけ、玉入れなら玉入れのことだけを書きなさいと繰り返し指導した。

Kくんは、国語の力の中でとりわけ読解力が秀でていたが表現力もすばらしいものを持っていて、作文も気が向くと、集中してとても良いものを

仕上げる事ができた。とにかく読書量の豊富さが、言葉の巧みな使い方にもつながっていたのだと思う。彼の題は「かけっこ」だった。

かけっこ

一の二〇〇〇〇〇〇〇〇

かけっこでぼくは五コースをはりました。いっしょけんめいはしたのに、Sくんにテープをきられてしまいました。ほんとうはりゆうのようにはしろうとおもっていました。ようちえんのせんせいがみにきてくれて、うれしかったです。

文面から、Kくんは、本当はコースをまっすぐに走ることさえ難しいのに、気構えだけは、彼のあこがれであるりゆうのように燃えていたということが、私の心に痛い程伝わってきた。それで、私はク

ラスの代表として彼の作文を学校便りにのせてもらうことにした。

十一 くじらぐも

秋になって、国語では『くじらぐも』という題材で学習を進めていた。学校の大好きなくじらぐもに語りかけたり、ジャンプしたり、背中ののって空を遊泳したりという楽しい内容だった。ちょうど空が高くなってほんわりとした雲も浮かんでいた頃だったので、私も少しでも臨場感を出そうと、校庭に出てジャングルジムの上に登らせ、「おーい、くじらぐもさあん」と語りかけさせたりして授業を進めていた。そして教室に戻って来て、音読を行ったり、ワークシートに登場人物の気持ちをなどを書かせたりした。

Kくんは、国語が大好きだったにもかかわらず、

もうその頃は教科書が無くなってしまっていた。整理整頓の苦手な彼にとつて、身の回りの物をなくすることは日常茶飯事で、教科書といえども例外ではなかった。そのつど、貸してあげていたのだが、Kくんのお母さんがまた器用な方で、手作りの教科書を持たせてくれた。絵も文字も、本当に美しく、温かさが紙からあふれていた。それを手にして朗読する時のKくんにこにことした、でもちょっと恥ずかしそうな顔が浮かんでくる。

「おーい、くじらぐもさあん」

と心のこもった絶妙の語り口。

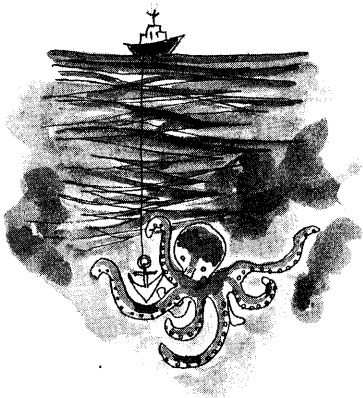
「あのくじらは、学校が好きなんだね」

子どもらしい声色で読む仕種は、周りの者を、文章の中へとひきこむ。自然、クラスのどこからともなく拍手がわき起こるのであった。読み終えたKくんに、Sくんがこう言った。

「Kくん、幸せ者じゃない、お母さんが作ってくれ

た教科書で読めるなんて」

Sくんは、下に赤ちゃんの弟が一人いて、お母さんは弟のせわに忙しい。ちょっぴり寂しさを感じていたのかもしれないが、私もKくんをとりまく家族



愛の温かさをしみじみと思った。

## 十二 鼻の穴にどんぐりが

校庭の大いちょうの木の葉が黄色く色づき、大粒のぎんなんがたわわに実った頃、理科では秋のはっぱの様子や、くぬぎ、こならの実の学習をしていた。そして教室の壁には、子ども達が集めてきたいろいろな葉を貼って作った絵が飾られ、窓ぎわのロッカーの上には、どんぐりがうす高く積まれるようになった。(秋だなあ) そんな感じのする一年二組の教室だった。

ある日のこと、

「みんな、このどんぐりで何作る?」

「やじろべえ」

「どんぐりごま」

そして、どんぐりを用いたおもちゃ作りにみんな夢

中になっていた時、Kくんはと見ると窓から外を眺めているようだった。

「Kくん、K! 席につきなさい!」

振り向いた彼のもっこりふくらんだ鼻にクラス中が注目した。何と両方の鼻の穴にどんぐりがつつこんであったのである。Kくんは、今までも口にいろいろな物を入れてしまい、幼稚園の頃に飲み込んだ何かが、胃の中に入ったままになっているといううわさもあったので、私は絶えず気にしていた。が、穴の中に入れるという子どもらしい発想は、危いが、分からなくもない。後日、おしりの穴にまでつつこんでしまったのはちょっと恥ずかしいが。

## 十三 初めての学芸会

♪どんぐり山のどんぐりは、

一年生は学芸会で『どんぐりのたび』というかわい

い劇を演じることになった。Kくんは、どんぐり達の水先案内人である。かにの役だった。会は二日間に渡って行われ、一日目は子ども達が鑑賞し、二日目は親達の鑑賞日に当てられていた。Kくんの作りが印象的であったことはもちろんだが、鑑賞のし方がまた独特であった。

当日、彼ほどの学年の劇も深く味わっているらしく、身じろぎもしないまま、目が舞台にくぎづけになっていた。そして例のごとく、くつはぬげ、靴下もおおげぐつ下になった。そのうち、片足が口の所まで持ち上げられ、くつ下を口でくわえ出したので、びろーんと、ものすごく長くのびてしまった。それでも本人は、そのことに気付かないぐらい集中し、演技にひきこまれていたようだった。

四年生の番になった。ミュージカル風のしゃれた演出で、楽器などが舞台上に並べられ、歌ったり奏でたりという場面がたくさんあった。運の悪いこと

にはその中に大太鼓があった。とたんにKくんの視線は舞台上から下へ移った。そして、一番前の席を飛び出して太鼓をドドンと両手でたたいてはニヤッと笑って席につく、しばらくたつとまたドドンとたく、を繰り返すようになってしまった。私はその日、ビデオどりの係もやっていたので、レンズを通して彼の動きに気付き、（誰か注意してくれないかな、それともビデオはこのままにしておいて自分のために行こうか）と考え始めた。と、

「植田さん、ちょっとKくん太鼓たたきに行かないようにおさえていて！」

という四年の先生の声。（それも、もつともなことだ）と思った私は、ビデオ係を中断して、Kくんが落ち着くようにマンツーマンでついていることにした。もつとはっきり言えば、力の限りふんじばっていたのである。



#### 十四 Kくんの花道

二学期の最後を飾ってのクリスマス会。盛りだくさんのプログラムの中でひときわすごかったのが、Kくん個人の出し物、太鼓たたきである。

前の晩、お母さんから電話があつて、

「先生、本当にいいんですか」

「いいですよ。楽しみにしています」

「それでは道具一式、あしたの朝届けます」

えっ道具一式？ なんじゃなんじゃ？ 私はてっきり、よくあるでんでん太鼓でもたたいてくれるのかと思つていたので（一体の道具一式とは何か）とその晩考えていた。

翌朝、届けられた物を見ると、あまりに本格的なので驚いてしまった。〇〇〇と名前の刻まれた小型の祭り太鼓にはやし太鼓、それにひょっとことおかめのお面、獅子頭、おまけに豆しぼりの手ぬぐ

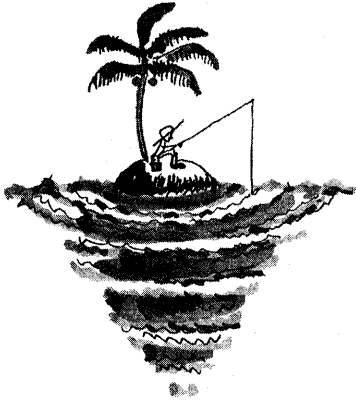
いとまさに〇一式であつた。

いよいよKくんの登場。手ぬぐいをきゅっと頭に結んだその様は、いなせな若い衆風だ。まずは祭り太鼓を力を込めてたたき、その次に踊るようなステップを混じえておはやし太鼓へと移動する。おはやし太鼓をリズムミカルにたたいた後、ひょっとこのお面をつけてコミカルに舞い、また元の祭り太鼓へと戻っていく。そのあまりの素人離れしたたたきぶりにクラス一同、そして見物に來た親達もやんややんやとはやしたてながら、半ばあ然として見ている。遅れて來たM君のお父さんは、我子をとりにこねた代わりにKくんのパフォーマンスにズームアップ、片時もレンズから目を離そうとしない。

「Kくん、見直しちゃった」

とは、彼が密かに、ではない大つびらに思いを寄せているSちゃんの弁。教頭先生も、U先生も見物に來た。と、突然Kくんは、ばちを置いて歌舞伎役者

演じる弁慶が花道をひきあげるところの六方。ター  
ンタンタンタンタタタタ……、クラスはさらにわ  
あっと盛りあがった。今日は、まさにKくんの花道  
であった。



夜、お母さんから電話があった。

「先生、どうもありがとうございました。Sちゃん  
にほめられて舞い上がってしまい、ぼくとSちゃん、  
龍の子太郎とあやみたいだなんて言って、幸せ  
そうに寝ました」

ちなみにKくんは、その後太鼓の会に入り、今も  
続けているが、本当の本格派をめざし、またチーム  
プレーもできるよう特訓中とのことである。

## 十五 あずきめし事件、一班の大活躍

三学期になって、Kくんは授業がおもしろくなく  
てよく壁の下から抜け出すようになった。いつ  
の間にか戻って来るので私も放っておいたのだが、  
次第に探索がエスカレートし、探しに行かなくては  
ならなくなった。が、他の子ども達の学習も進めな  
くてはいけない。一人の児童のために他を犠牲にす

ることはなるべく避けたかったので、私は体力が勝負という状況に陥っていった。

ところが子どもはおもしろく頼りになるものである。彼と同じようにして遊んでいるためか、あるいは本当はKくんのようにしたいのだが先生の手前がまんしてよい子になっているためか、Kくん探しは私よりうんとうまかった。とりわけKくん属するYちゃん以下三名で構成されている一班は、探すために全力を注ぎ、そして必ず誰か一人が伝令係となつて、

「先生いたいた、あそこの木の上にいた」と、言いに来てくれるのであった。

ある日のこと、給食前の四時限目、Kくん探しが始まった。またもや一班の大活躍。私より早く見つけた。そして彼を連れて戻つて来た。

「先生、Kくんって給食、あずきめしだとよく食べるでしょ。今日のこんだて表にあずきめしって書い

てあったから、Kくん、今日はあずきめしだよ。降りておいで」と言ったら、するすると木から降りて来たんだよ」

と、Yちゃんが得意になって話してくれた。

## 十六 乱れに乱れた修了式

三学期も終わりの頃、私は疲れから体調をくずし、一週間程学校をお休みしてしまった。入れ替わりたち替わりいろいろな先生が、一年二組の授業を進めてくださったが、Kくんの荒れ具合は相当なものだということが私の耳まで届き、また子ども達から「元氣の出る袋」なるものをもらって、私は寝床で涙したりしていた。Kくんのことでは校長先生に、もう少し学校全体でみていただけないか、とお願いしたが、あまり良い返事をもたえず、私は悩んでいた。それでも学年の先生の助けも借りてなんと

か体調を整え、三学期終了までの数日を、力をふりしぼって過ごした。

そしていよいよ修了式。私は独言を言って落ち着かないKくんを先頭に、二列を先導して体育館に入り、式が始まるまで体育座りをさせていた。

校長先生が舞台上に登り、挨拶をする。定年を迎えたS先生にとって、これが最後の修了式であるはずだった。多分、万感の思いを込めて話をしていただろう。突然、Kくんが校長先生に対し攻撃的な態度に出て、舞台によじ登ろうとした。(私の休み中、何か嫌なことでもあったのかな、私の校長先生への思いが通じているのかな。私の心とKくんの心は同じだ) 私はもはや止めようとはしなかった。乱れに乱れる彼のありのままを受け入れ、全先生に理解してもらおうことが大切であると考えた。体育館は子ども達のがやがやで騒然とし、校長先生の話し声はほとんど聴こえなくなった。

こうして、Kくと私の一年間は終わった。が、彼は私に、いや学校全体に様々な問題を投げかけてくれた。私は、この問題を常に頭の片隅に置き、決していく方向を模索していかれたらと思っていた。いわば一つの始まりの終わりだった。

(元・東京都小学校教諭)

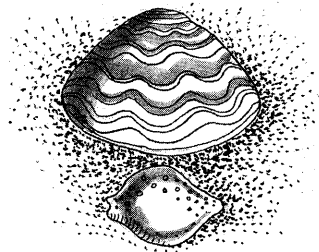
※ LD児とは

学習障害 (Learning Disabilities: LD) 児

93 卷五月号参照

# カウンセリングマインド

松井 とし



平成五年度から新たに、演習（ロールプレイ）を多く取り入れた「保育技術専門講座」が開講されることになった。従来は「保育技術」というと、ピアノを弾きながらの音楽リズムや、絵画製作、折り紙や手遊び、素話など、教師が子どもの心を引きつけるための技術といったようなものが考えられていたように思う。しかしこれからの幼稚園教育においてはこのような小手先の技術ではなく、一人ひとりの幼児の育ちを支えていくために、カウンセリングマインドを理解し、身につけた「幼児理解」こそが大切な保育技術であり、専門性であるということなのである。

社会の変化に伴って幼児をとりまく生活環境も大きく変わってきた。こういう時代に幼稚園に期待されることは、幼児が自由感に満ちて水と泥と太陽のもと、人や自然とのふれ

あいの中で、好きな遊びを存分にできる環境を保障することではなかろうか。主体的な生活、人間性回復といった意味において、幼児教育はプレイセラピーであるといっても過言ではないと思う。幼児一人ひとりの日々の生活を暖かく支える人として、教師の在り方はとても重要である。「その子どもになりきることはできない」という謙遜さを持ちながら幼児の心を理解し援助する、また保護者の話を聴き相談に応じること等、心の専門家から学ぶことは多い。これまであまり自覚されてこなかったのだろうが、幼稚園の先生たちの多くはカウンセリングマインドを持っている。かがんで子どもと視線を合わせながら一生懸命につぶやきに耳を傾け、一人ひとりの子どもを受けいれようとしている。その上に立ち、さらにこれからはカウンセリングマインドを自覚し、子どもと自分とのかかわりを振り返り省察していく。その過程を大切に、人間学という視点から保育の専門性を磨いていくことが不可欠になってきているのだと思う。

講座終了後のアンケートに「先生の分かりやすい、はつきりとした話し方はとても落ち着いた」とか「全ての講師の受容的な態度に感動した。演習が多く不安だったが、先生がどんなことでも暖かく受け止めて下さったので自信を持つて参加することができた」「研修そのものも勿論だが、講師の先生方の姿勢にも多くのことを教えられた」等とあった。こうした小さな気づきや自己の振り返りが、大きな力になっていくことを期待している。

# ある日の育児日記から

(43)

佐藤 和代



主(7歳)の場合

有(2歳)の場合

有が水ぼうそうにかかりました。プツプツを見た瞬間、頭を駆けめぐったのは、仕事のスケジュール。私の仕事はほとんど在宅でできるもので融通がきくのですが、それでも二週間近く休むとなると大変です。

どうして？ 家でできるなら子どもが病気だっ  
てできるでしょ？ と、独身の友人に言われました。それがね、できない。ハイハイ前の赤ん坊ならともかく、二歳じゃ無理。

とにかく、紙をひろげれば寄ってきてくしゃくしゃにする。パソコンをつければすかさずキー

ボードにさわりにくる。おもしろそうだからくるのかな、と、絵も何もない資料を読んでも、取り上げてはらばらにしないといけない。結局、どの仕事ならできかという問題ではなさそうです。家事ならおしゃべりしながらできるけど、仕事となるとどうしても集中しなくては。この集中が、子どもには脅威らしい。お母さんは仕事始めるとほくのこと忘れちゃうの、だめだよ！ ということでしょう。

とはいえ、保育園に行けない以上なんとかしなくちゃ。レンタルビデオから実家の母まで（一緒にしてごめんさい）総動員。保育園のありがたさが身にし

みた二週間でした。



おいりにアツアツのわらわらばい。おしめをとるとまかか見にやってきます。何ぞに??

# 海は友だち

吉澤 道子

那覇泊港からフェリーで二時間、身体中の細胞がすっかり潮の香に満たされ生き返ったようになる頃、目指す座間味島に到着する。

半年振りの大好きな海との再会である。

まずボートで近くの無人島に渡る。三点セット（マスク、シュノーケル、フィン）を

着けるのもどかしく泳ぎ出す。水のやさしさがさっと全身を包む。自分のたてる小さな波が皮膚をなで、ピチャピチャという空気と水の戯れる音が鼓膜に響いてくる。海水の浮力を楽しみながら二十メートル程泳ぐと、もう見覚えのある根（サンゴが塊になっている



所)に着く。ただ泳いでいるだけでも楽しいのだが、その中に入って行かずにはいられない。呼吸を整え潜ってみる。ちょうどペーミントゼリーの中にスルリと頭から滑り込んで行く感じだ。水深三メートル、身体の重さが消えフィンが確実に水をとらえゆつくりと潜水して行く。底に着いても初めは五秒と息が続かない。そのうち身体が海水同化術を想い出すと、三十秒位は楽しめるようになる。カラフルな魚たちは上から眺めているだけでもきれいだ、一緒に泳ぐと本当の美しさがわかる。さらに良いのは下から海面をバックに見上げる方法だ。上方から差し込む陽光に煌いてガラス細工のように繊細で美しい。これだけはダイビングをする者にだけ許されるぜいたくである。

浅瀬の根についている小魚にはスズメダイ

の類が多い。コバルトスズメとソライロスズメ(デバスズメ)がチラチラと泳ぐ様はまるで動く宝石だ。白に黒いストライプがおしゃれなミスジリュウキュウスズメもいる。イソギンチャクと共生するクマノミ、このペアがじゃれ合う様子はいつまでも見ていても飽きない。ゴカイの仲間のイバラカンザシは円錐形にかんざし状の触手を出しているのだが、手で水を送るとあわてて引っ込める。この動作がかわいくてついからかってしまう。中には主のようなおじさん顔のウツボが棲みついている。そしてヒラヒラ舞い泳ぐチョウチョウオオやヤッコの仲間、いつ行っても会えるおなじみさん達である。ここで二十分も遊んでいると身体がすっかり海に慣れてくる。

いよいよポンペを背負って潜るスキューバダイビングとなる。さすがに一本めは緊張す

る。不思議なもので、少しでも不安を感じる  
と身体が沈んで行かない。水に対する潜在的  
恐怖が自然と頭を浮かせてしまいうらしい。思



いきって肺の中の空気をフウツと吐き出すと  
ちよつと沈み始める。一旦全身が水面下に入  
ってしまふと、魔法にかかったように楽に  
潜り出せる。『ああこの感じ、これこれ。』  
思わず歓声をあげる。その声は音にならずボ  
コボコと大きな泡になって上がって行く。顔  
に当たる泡のくすぐったさも嬉しい。水の中  
では全てがゆったりとしていて、それが大き  
なやすらぎを感じさせる。

シュノーケリングと違い、スキューバでは  
長く水中に滞在できる。深度で異なるが、三  
十メートルまでなら三、四十分は潜ってい  
られる。ルールを守って余裕のあるダイビング  
をすれば、誰でもしばし人魚の生活を楽しめ  
る。熱帯の魚たちはどうして皆こんなきれ  
いな色をしているのだろう。海の青に染まった  
サンゴやソフトコーラルも水中ライトで照ら

すと極彩色をしているのがわかる。一糸乱れず塊になって泳ぐ小魚や幼魚も大群になると迫力がある。回遊魚のバラクーダやイソマグロの悠然と泳ぐ姿は風格さえ感じる。マンタや海亀、ナポレオンフィッシュなどは見られただけで嬉しくなってしまう。一方海の中の景観も陸上に劣らず変化に富んでいる。白い砂以外何もない砂漠もあれば断崖絶壁もある。無数のサンゴや連なって作る草原もあれば、トサカというソフトコーラルが一面を埋めたお花畑まである。鮮やかな赤や黄色をしているが、中でも紫のものが幻想的で美しい。ここを浮遊していると妖精になった気分だ。心地良さのあまりつい自分の力を過信してしまふことがある。『これ位大丈夫だろう』という甘い判断がとりかえしのつかないことになることもある。海の中の大胆な行

動は決して自慢にならない。むしろ一小動物としての謙虚さこそ似つかわしい。

ダイビングの楽しみ方は人それぞれである。景色や魚を観ているだけの人、写真を撮る人、探検の好きな人など、海の中は興味の尽きないフリーゾーンである。だが一番の魅力は重力からの解放と水との一体感だろう。完全にリラックスしている時は心も身体も透明になり海の青に同化してしまう。地球のゆりかごに抱かれているという幸福感に酔いしれる。

私は海とダイビングから数えきれない程の素晴らしい贈り物をもたらった。ただ一つ困ったことは水族館を楽しめなくなってしまうことである。水槽の中の色褪せた魚たちを見るのは辛い。自然の中の姿とはあまりにも違ってしまっている。水族館で魚に興味を持った

なら、是非海の中にいる本物の彼らにも会いに行ってもらいたい。潜るのが無理ならせめて三点セットを着けて泳いでほしい。海の中の美しさと豊かさを知ったら、人にも動植物にも、そして地球にもやさしい人にならずにいられないことだろう。本当はこうして潜ることも彼らには迷惑なのだ。それでも海の魅力からはのがれられない。せめてなるべく邪魔にならないよう穏かなダイビングを心がけたいものだ。

子育てのため海とのかかわりもダイビングから海水浴になり、早や七年がたってしまった

た。海と共に過ごした日々はそのエッセンスだけがカラー写真のように一枚一枚の美しい絵として想い出される。子どもと遊ぶ海辺にも無数の発見があり、砂と戯れているだけで満たされた気持ちになる。それでも尚、目下の私の夢は小学生になった息子とバディを組んで座間味の海に潜ることだ。初めて海の世に身を浸した時、何を思うだろうか。待ち遠しくてワクワクしている。その日まで、あの美しい海はあのままの姿で同じやさしさで私たちを迎えてくれるだろうか。私たちは母なる海に愛され守られている。私たちも同じ愛の心で海を守って行きたいものである。

# 編 集 後 記

息子は生後八か月から二歳半まで保育園にお世話になった。初夏のお天気の良い日中は、水遊びの絶好のチャンス。でも、息子はその水遊びが嫌いで、他の子の遊ぶ水しぶきが自分にかかるのをさけるようにして少し離れて一人で遊んでいることが多かった。指絵の具の時もそう。年長組にいた姉にさそわれてやってはみたものの……。泣きながら絵の具をこねている写真が残っている。みんながおもしろそうに指絵の具のぐちゃぐちゃを楽しんでいるのに、この子は泣きながら、でも、ぐちゃぐちゃとやっている。いやならやらなくてもいいのに、泣きながら絵の具

をこねている姿は、一体何なのだろう。

一歳の息子には、ただいやいやという形でしか表現できなかったが、もしかしたら、保育園の生活全部自分のものとなっていないのに、いくら先生が「楽しいよ!」と言ってくれたって、そんなに簡単には受け入れられない、かろうじてお姉ちゃんが一緒の時には、やってみようかな、と指をつっこんでみたものの、やっぱり涙が出てきちゃったという所かもしれない。

息子だって本質的に水が嫌いな訳ではない。むしろ好きな方だ。

親から離れた園での生活が、心からその子の生活の一部になった時、何でも受け入れられるようになるのだろう。息子の場合はかなり時間がかかったが……。

(K)

## 幼児の教育

第九十三巻 第七号

(一九九四年七月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成六年七月一日

編集兼発行人 本田 和子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一七一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

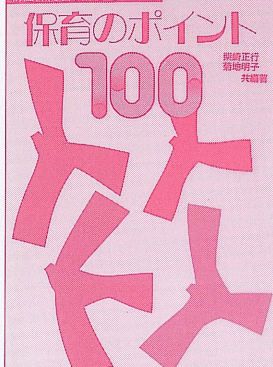
六一一四一九

☎〇三―五三九五―五六〇四

振替口座 東京九一―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

新任保育者研修シリーズ①



新任保育者研修シリーズ

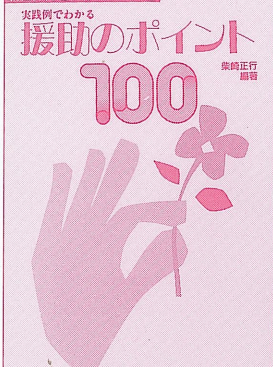
## ①保育のポイント100

保育者が直面するさまざまな保育の問題点に保育のエキスパートの方々が要点整理を示した解説書。保育現場で行き詰まった時の解決策の手がかりがつかめる保育資料。園内や地域の勉強会や研修会の参考資料に役立つ。

柴崎正行・菊地明子／編著

A5判・232頁・定価2,400円(税込)

新任保育者研修シリーズ②



新任保育者研修シリーズ

## ②援助のポイント100

援助によって保育が変わる。援助の考え方、援助の仕方を中心に保育現場で直面する問題点100項目を取り上げ、項目毎に実践事例に解説する方式で保育方法を整理した実践書。それぞれに保育者のアイデアが生かされていて、保育の行き詰まりの具体的な解決策がつかめる。

柴崎正行・著

A5判・236頁・定価2,400円(税込)

新任保育者研修シリーズ③



新任保育者研修シリーズ

## ③環境のポイント100

環境によって保育も変わる。環境の生かし方、与え方を中心に保育現場で直面する問題点100項目を取り上げ、項目毎に成功実践事例に解説を加える方式で保育方法を整理した実践書。環境の生かし方の具体的な参考資料となる。

柴崎正行・著

A5判・236頁・定価2,400円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**



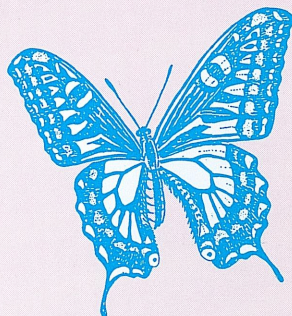
## 遊びが育つ保育実技

新幼稚園教育要領の課題である「遊び中心の保育」を実践するために、イラスト入りで遊びの実例を紹介したシリーズ

### ⑳保育のための 自然ウオッチング



- 領域「環境」の新しいハンドブック———  
子どもの質問に答えるための虎の巻!
- 環境に優しくする心を育てる唯一の保育図書!



身近な動植物の姿や仕組みをやさしいイラスト紹介して子どもの好奇心、質問に答えるためのハンドブック。著者自身の絵と文が楽しく分かりやすく、知らず知らずのうちに環境に優しくする心を育てられる唯一の保育図書です。

山内昭道・著

B5変型判・128頁・定価2,100円（税込）

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレール館**